B

事案名	千歳市の事案　（北海道１－１）
分類	○ 生産・保有 ○ 廃棄・遺棄 ○ 発見・被災・掃海等処理
資料	・Intelligence Report on Japanese Chemical Warfare Volume Ⅵ〔1〕 ・「化学兵器調査ノ件報告」昭和２０年１１月５日〔2〕 ・「化学戦資材ノ件回答」昭和２１年3月9日〔3〕 ・「浜名湖に投棄された軍用ガスの処分について（通知)」昭和２４年１２月２８日〔4〕 ・「各航空廠引渡目録」２/２〔5〕 ・「旧軍ガス弾等の全国調査結果報告（案)」資料１の２〔6〕 ・『北海道新聞』昭和３０年3月２２日・同夕刊〔7〕 ・『毎日新聞』昭和３０年3月２２日〔8〕
資料内容概要	終戦時に、海軍航空廠千歳工場には、イペリット爆弾２１７発もしくはイペリット３．７ｔが保有されていたとの情報がある。なお、終戦後、旧軍の各航空廠にあったイペリット爆弾は米軍の監督指揮により海上投棄されたといわれている。 ○生産・保有情報 ・資料によれば、終戦時に第４１海軍航空廠（千歳・美幌）にはマスタード６０kg 爆弾２１７発が存在していたと記載されている〔1〕。 ・資料によれば、終戦時に、北海道千歳第４１海軍航空廠には、６番１号爆弾２１７発が存在していたと記載されている〔2〕。 ・資料によれば、昭和２０年9月2日に、北海道千歳第４１海軍航空廠にはガス爆弾２１７発が存在していたと記載されている〔3〕。 ・資料によれば、終戦時に､第４１海軍航空廠千歳工場には、イペリット爆弾装着用缶２１７個（内容量計３,６８９Ｋｇ）が存在していたと記載されている〔4〕。 ・資料によれば、終戦後の段階で､第４１海軍航空廠千歳には６０Ｋｇ１号爆弾２１７個が存在していたと記載されている〔5〕。 ・資料によれば、終戦時に海軍航空廠千歳工場にはイペリット３.７ｔが存在していたと記載されている〔6〕。 ○廃棄・遺棄情報 ・資料によれば、各航空廠工場にあった爆弾装填用缶入りイペリットは昭和２１年８月頃までの間に米軍の監督指示により海中に投棄処分されたと記載されている〔4〕。

	○発見・被災・掃海等処理情報 ・資料によれば、昭和３０年３月１４日、米軍千歳キャンプ第３基地野外集積所で集積弾薬の自衛隊への引き渡し作業の一部として前期弾薬集積所から掘り出した空ボンベを作業員が洗浄していたところ、残っていた液の糜爛性ガスにより作業員２０数名が被災し、目が見えなくなったり呼吸困難、火ぶくれの症状があらわれた。作業を手伝った自衛隊員約１０名も軽いガス中毒を起こしたと記載されている〔7〕〔8〕。 　なお、記事の中では毒ガスが旧日本軍のものであるのかどうかについては記されていない。

B

事案名	美幌町の事案　（北海道１－２）
分類	○ 生産・保有 ○ 廃棄・遺棄
資料	・Intelligence Report on Japanese Chemical Warfare Volume VI〔1〕 ・「各航空廠引渡目録」２/２〔2〕 ・『朝日新聞』平成８年１０月１９日〔3〕 ・証言〔4〕 ・『美幌新聞』平成８年１０月２８日〔5〕 ・『読売新聞』平成８年１０月２６日〔6〕 ・証言〔7〕
資料内容概要	終戦時に、第４１海軍航空廠美幌分廠には、イペリット爆弾と通常弾の総計で１,０６０発が保有されていた。終戦後、各航空廠にあったイペリット爆弾は米軍の監督指揮により海上投棄されたといわれているが、同分廠にて保有していたイペリット爆弾と通常弾は、旧軍によって、網走沖及び屈斜路湖に遺棄されたとの証言がある。 ○生産・保有情報 ・資料によれば、終戦時に第４１海軍航空廠（千歳・美幌）にはマスタード６０Kg爆弾２１７発が存在していたと記載されている〔1〕。 ・資料によれば、終戦後の段階で、第４１海軍航空廠美幌には、６０Kg通常爆弾・６０Kg陸用爆弾・６０Kg１号爆弾・６０Kg２号爆弾が総計１,０６０発存在していたと記載されている〔2〕。 ・元海軍美幌航空隊航空廠関係者の証言として、「終戦時に同廠には、同廠の西側に掘った数本の隧道に一つずつ木箱に入れて保管しており、１００発前後あったという（この毒ガス弾は後に網走港沖に投棄したと同僚から聞いたとのこと)。投棄された毒ガス弾は皮膚がただれるようなものと聞いているが、木箱に入っていたので、形は分からない」と記載されている〔3〕。 ○廃棄・遺棄情報 ・元第４１海軍航空廠美幌分工場補給課の軍属の証言として、毒ガス弾は昭和１９年に１００発程度運ばれてきた記憶がある。上司が毒ガス弾だと教えてくれた。終戦直前に出張があり、「８月２２日に美幌に戻ってきたときにはすでに普通弾も毒ガス弾も処分されなくなっていた。当時作業に携わっていた部下の話では、爆弾は全部網走の海に捨てたと言っていたのを聞いているので多分ガス弾も混じっていたものと自分

	なりに判断した」としているが〔４〕、同証言者は、新聞記事によれば、第４１海軍航空廠美幌分工場長から、保管していた爆弾の一部を米軍引き渡す分として残し、大半は網走港沖に捨てたことを聞いた」と記載されている〔５〕。 ・元美幌警防団副部長の証言として、「美幌警察署長の命令で、美幌航空隊の地下トンネルに保管していた爆弾類や小銃類の処理班に組み込まれ、弾薬類などの運搬と海中投棄の作業にあたった。網走港から漁船で、「二つ岩」を左にした状態で、約３０～４０分出た辺りに捨てた。証言者は同様の作業にあたった同僚から、その後、「自分は屈斜路湖に捨てに行った」との話を聞いているが、捨てた爆弾類のなかに毒ガス弾があったかどうかは確認していない」と記載されている〔６〕。 ・元第４１海軍航空廠警防班の軍属の証言として、「昭和１８年から２０年までの間、ガス弾は一度に１００発ずつ３回列車で輸送されてきた覚えがある。敷地内には地下壕が多数あり、ガス弾専用の地下壕に入れてあった。終戦時に、上司から、通常弾は網走沖に投棄し、『ガス弾は屈斜路湖へ輸送し湖に投棄すること』との指示を受け、２日間にわたり、一日約３０発計６０発を屈斜路湖に投棄させたが、証言者自身はトラックに積み込む作業を行っただけで廃棄場所へは行っていない。『ガス弾についてはすべて屈斜路湖に投棄しており、網走には投棄していない。投棄場所は、湖にある半島付近に多く投棄したと聞いている』と記載されている〔７〕。

水

事案名	屈斜路湖の事案　（北海道１－３）
分類	○廃棄・遺棄 ○発見・被災・掃海等処理 ○その他
資料	・『読売新聞』平成８年１０月２６日〔1〕 ・証言〔2〕 ・『北海道新聞』平成７年５月２５日夕刊〔3〕 ・『北海道新聞』平成７年８月２６日〔4〕 ・『毎日新聞』北海道平成７年９月１１日〔5〕 ・『朝日新聞』北海道・『毎日新聞』夕刊平成７年９月２１日〔6〕 ・『北海道新聞』平成７年９月２１日〔7〕 ・『毎日新聞』平成７年９月２２日夕刊〔8〕 ・『毎日新聞』平成７年１０月１２日夕刊〔9〕 ・『毎日新聞』地方版平成８年５月１２日〔１０〕 ・『毎日新聞』地方版平成８年１０月３日〔１１〕 ・『読売新聞』『朝日新聞』平成８年１０月１６日〔１２〕 ・『朝日新聞』平成８年１０月２０日〔１３〕 ・『毎日新聞』北海道平成１２年８月５日〔１４〕 ・『毎日新聞』北海道平成１２年９月２３日〔１５〕 ・『朝日新聞』・『毎日新聞』北海道平成１２年９月２４日〔１６〕 ・「屈斜路湖遺棄砲弾模の物件の潜水調査に関する大湊地方隊一般命令」平成８年４月２５日〔１７〕 ・「屈斜路湖遺棄砲弾様物件の潜水調査結果について（報告）」平成８年５月２３日〔１８〕 ・「屈斜路湖遺棄砲弾様物件の潜水調査結果」平成８年５月２３日〔１９〕 ・「屈斜路湖遺棄砲弾様物件の揚収作業等結果について（報告）」平成８年１０月２５日〔２０〕 ・「屈斜路湖遺棄砲弾様物件の揚収作業等結果」平成８年１０月２５日〔２１〕 ・『朝日新聞』平成１２年６月５日〔２２〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔２３〕
資料内容概要	終戦時に、第４１海軍航空廠美幌分廠にて保有していたイペリット爆弾と通常弾は、旧軍によって、網走沖及び屈斜路湖に遺棄されたとの証言がある。また、陸軍計根別飛行場に存在した毒ガス弾も旧軍によって屈斜路湖に投棄された後、湖底で発見され、処理が行われた。 ○廃棄・遺棄情報 ・元美幌警防団副部長の証言として、「美幌警察署長の命令で、美幌航空隊の地下トンネルに保管していた爆弾類や小銃類の

	処理班に組み込まれ、弾薬類などの運搬と海中投棄の作業にあたった。網走港から漁船で、『二つ岩』を左にした状態で、約３０～４０分出た辺りに捨てた。証言者は同様の作業にあたった同僚から、その後、『自分は屈斜路湖に捨てに行った』との話を聞いているが、捨てた爆弾類のなかに毒ガス弾があったかどうかは確認していない」と記載されている〔1〕。 ・元第４１海軍航空廠警防班の軍属の証言として、昭和１８年から２０年までの間、ガス弾は一度に１００発ずつ３回列車で輸送されてきた覚えがある。敷地内には地下壕が多数あり、ガス弾専用の地下壕に入れてあった。終戦時に、上司から、通常弾は網走沖に投棄し、「ガス弾は屈斜路湖へ輸送し湖に投棄すること」との指示を受け、２日間にわたり、一日約３０発計６０発を屈斜路湖に投棄させたが、証言者自身はトラックに積み込む作業を行っただけで廃棄場所へは行っていない。「ガス弾についてはすべて屈斜路湖に投棄しており、網走には投棄していない。投棄場所は、湖にある半島付近に多く投棄したと聞いている」と記載されている〔2〕。 ・ 元造林・造材業者の証言として、「昭和２０年８月２２日か２３日に、陸軍計根別飛行場の軍曹１人がトラックを運転してきて自宅に訪れてきてガス弾の処理の協力を求めてきたので、作業員に協力を呼びかけ、屈斜路湖にプロパンガスボンベのような形をした金属製容器を投棄した」と記載されている〔3〕。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・平成７年に、「住民が終戦時に陸軍の依頼で屈斜路湖にプロパンガスボンベのような金属製容器を投棄した」との証言があり、これを受けて北海道は平成７年９月２１日から探知機等で北海道屈斜路湖の調査を開始し、翌年には陸上自衛隊も参加して平成８年１０月１９日に引き揚げ作業が完了した。回収された２６発の爆弾は、イペリットとルイサイトの混合爆弾であることが確認された。密封し一時保管されたが、平成１２年に民間業者と自衛隊が毒ガスを中和処理した〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕〔9〕〔１０〕〔１１〕〔１２〕〔１３〕〔１４〕〔１５〕〔１６〕〔１７〕〔１８〕〔１９〕〔２０〕〔２１〕〔２３〕。 ○その他情報 ・「知床の歴史を語る会」の代表が平成１２年６月４日に広島県大久野島で講演し、屈斜路湖で毒ガス弾が２６個引き揚げられたが、証言者が「弾の形状も違う上、引き上げ地点も我々が沈めた場所と３５０メートル以上離れている。全く別な毒ガス弾」と述べていたので直接話しを聞いたところ、２６発

	の毒ガス弾以外にも別の遺棄事実があったことを確信したとして、「調べていくうちに海軍航空隊廠・美幌分工場の補給班が４トントラック８台分の毒ガス弾を屈斜路湖に遺棄した事実をつきとめた」と講演した。同会代表は、平成１２年５月に、弟子屈町に再調査依頼の文書を提出したが、町側は、８,０００ヘクタールの面積があるので遺棄地点を特定できない、町に湖の管理の権限はない、昭和２０年当時は酸性湖で毒ガス弾は急速に腐食し、内容物は流出したと考えられる等と回答した〔２２〕。

水

事案名	網走沖の事案　（北海道１－４）
分類	○ 廃棄・遺棄 ○ 発見・被災・掃海等処理
資料	・証言〔1〕 ・『美幌新聞』平成８年１０月２８日〔2〕 ・『読売新聞』平成８年１０月２６日〔3〕 ・証言〔4〕
資料内容概要	終戦後、各航空廠にあったイペリット爆弾は米軍の監督指揮により海上投棄されたといわれているが、第４１海軍航空廠美幌分廠にて保有していたイペリット爆弾と通常弾は、旧軍によって、網走沖及び屈斜路湖に遺棄されたとの証言がある。 ○廃棄・遺棄情報 ・元第４１海軍航空廠美幌分工場補給課の軍属の証言として、毒ガス弾は昭和１９年に１００発程度運ばれてきた記憶がある。上司が毒ガス弾だと教えてくれた。終戦直前に出張があり、「８月２２日に美幌に戻ってきたときにはすでに普通弾も毒ガス弾も処分されなくなっていた。当時作業に携わっていた部下の話では、爆弾は全部網走の海に捨てたと言っていたのを聞いているので多分ガス弾も混じっていたものと自分なりに判断した」としているが〔1〕、同証言者は、新聞記事によれば、第４１海軍航空廠美幌分工場長から、保管していた爆弾の一部を米軍に引き渡す分として残し、大半は網走港沖に捨てたことを聞いたと証言している〔2〕。 ・元美幌警防団副部長の証言として、「美幌警察署長の命令で、美幌航空隊の地下トンネルに保管していた爆弾類や小銃類の処理班に組み込まれ、弾薬類などの運搬と海中投棄の作業にあたった。網走港から漁船で、『二つ岩』を左にした状態で、約３０～４０分出た辺りに捨てた。同様の作業にあたった同僚から、その後、『自分は屈斜路湖に捨てに行った』との話を聞いているが、捨てた爆弾類のなかに毒ガス弾があったかどうかは確認していない」と記載されている〔3〕。 ・元第４１海軍航空廠警防班の軍属の証言によれば、昭和１８年から２０年までの間、ガス弾は一度に１００発ずつ３回列車で輸送されてきた覚えがある。敷地内には地下壕が多数あり、ガス弾専用の地下壕に入れてあった。終戦時に、上司から、通常弾は網走沖に投棄し、「ガス弾は屈斜路湖へ輸送し湖に投棄すること」との指示を受け、２日間にわたり、一日約３０発計６０発を屈斜路湖に投棄させたが、証言者自身はトラックに積み込む作業を行っただけで廃棄場所へは行っていない。「ガス弾についてはすべて屈斜路湖に投棄しており、網走に

	は投棄していない。投棄場所は、湖にある半島付近に多く投棄したと聞いている」としている〔4〕。

水

事案名	小樽市の事案　（北海道１－５）
分類	○ 生産・保有 ○ 廃棄・遺棄
資料	・証言〔1〕 ・『毒ガス戦関係資料Ⅱ』１９９７年〔2〕 ・「厚別弾薬庫　開設１０周年記念誌」昭和３８年2月1日〔3〕 ・『読売新聞』平成１５年9月2日〔4〕 ・『北海道新聞』『毎日新聞』平成１５年9月3日〔5〕 ・『朝日新聞』平成１５年9月4日〔6〕
資料内容概要	北海道小樽市は戦争末期に毒ガス弾等の集積地となっていた。終戦時、北海道陸軍兵器補給廠が保有していた毒ガス弾等は、米軍進駐までに、旧軍により小樽湾に海洋投棄及び北海道留萌市内の廃坑に埋設し、爆破処理された。 ○生産・保有情報 ・元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長の証言として、「終戦時、厚別弾薬庫（札幌市）及び小樽出張所（小樽市）に毒ガス兵器が存在していた」と記載されている〔1〕。 ・資料によれば、昭和１９年1月２９日の「大陸指第千八百二十二号」とこれに基づく「化学戦準備要綱」で報復的毒ガス戦の準備として小樽に地上ガス弾薬０．９師団分とガス爆弾１，５００発を同年2月末までに集積するよう指示したと記載されている〔2〕。 ○廃棄・遺棄情報 ・終戦時に、厚別弾薬庫では9月１７日の米軍進駐迄に終戦処理が行われ、「貨車７輌分に及ぶ大量の催涙ガス弾は小樽沖と留萌沖において海中処分を図った」が、小樽沖では、浮いて沈まない缶を沈ませようとしていたところ、缶が発火して全体に着火し、作業をしていた見習士官数名が死亡したと記載されている〔3〕。 ・元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長による証言によると、小樽湾に「あか筒」を海洋投棄した。この作業で死亡したのは6名であったと記載されている〔1〕。 ・新聞記事によれば、北海道が元陸軍関係者から、札幌市内の爆薬庫に「くしゃみ弾」が貨車７輌分あり、「そのうちの５輌分を留萌市内の廃坑に埋めて爆破し、2輌分は小樽市内の祝津港沖に投棄した」の証言を得ている〔4〕〔5〕〔6〕。

C

事案名	留萌市の事案　（北海道１－６）
分類	○ 廃棄・遺棄 ○ 発見・被災・掃海等処理 ○ 現在の状況
資料	・証言〔1〕 ・「厚別弾薬庫　開設１０周年記念誌」昭和３８年２月１日〔2〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成６年８月１０日〔3〕 ・「るもい再発見」〔4〕 ・『読売新聞』平成１５年９月２日〔5〕 ・『北海道新聞』『毎日新聞』平成１５年９月３日〔6〕 ・『朝日新聞』平成１５年９月４日〔7〕 ・証言〔8〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成１５年９月５日〔9〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査に係る留萌の事案について」平成１５年９月２４日〔１０〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成１５年９月２５日〔１１〕 ・『日刊留萌』平成１５年９月２６日〔１２〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔１３〕
資料内容概要	終戦時、陸軍兵器補給廠が保有していた毒ガス弾等は、米軍進駐までに、旧軍により小樽湾に海洋投棄及び北海道留萌市内の廃坑に埋設し、爆破処理された。 ○廃棄・遺棄情報 ・元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長の証言によれば、「昭和２０年８月１８日から２０日頃までに、陸軍兵器補給廠厚別常駐班保有の毒ガス弾（くしゃみ剤貨車約５輌分）を、証言者の指揮の下、留萌市内の廃坑内に詰め、爆破処理した」と記載されている〔1〕。 ・終戦時に、厚別弾薬庫では９月１７日の米軍進駐迄に終戦処理が行われ、「貨車７輌分に及ぶ大量の催涙ガス弾は小樽沖と留萌沖において海中処分を図った」が、小樽沖では浮いて沈まない缶を沈ませようとしていたところ、缶が発火して全体に着火し、作業をしていた見習士官数名が死亡した。このため、海中投棄の計画を急遽変更し、留萌市内の廃坑に入れ爆破処分したと記載されている〔2〕。 ・新聞記事によれば、証言者は、昭和２０年夏に証言者の父親ら地域の人たちがトラックで運ばれた木箱を何度も留萌市郊外の山中に運び込んだ後に爆破された。その後付近の道路に差しかかる度に目がチカチカして涙が出たり、くしゃみ、鼻汁が出て、のどが痛くなった。山中のアカダモの木がほとんど枯れてしまったとのこと。また、別の住民は、「終戦後、時期はは

	っきり記憶していないが、『峠下地区に催涙ガスのようなものが漏れているとの情報で調査に来た』という道の職員を現地に案内したことがある」と証言している〔３〕〔４〕。 ・新聞記事によれば、北海道が元陸軍関係者から、札幌市内の爆薬庫に「くしゃみ弾」が貨車７輌分あり、「そのうちの５輌分を留萌市内の廃坑に埋めて爆破し、２輌分は小樽市内の祝津港沖に投棄した」との証言を得ている〔５〕〔６〕〔７〕。 ・住民の証言によれば、「昭和２０年１１月頃に、妻から留萌市内の廃坑内で毒ガスを廃棄したとの話を聞いて爆破処理現場を訪れてみたら、坑道口から入ると整然と並べられた木箱やジュースの空き缶のようなものが散乱していたが、いずれも中身は吹き飛んでいて無かった。坑道の中にはガスが残っていたので、くしゃみや鼻水等に苦しんだ」と記載されている〔８〕〔９〕。 ○発見・被災・掃海等処理 ・昭和３７年６月１２日に、北海道留萌市で、くしゃみ性ガス（弾）が１本発見され、自衛隊が爆破処理したと記載されている〔１３〕。 ○現在の状況 ・留萌市内の廃坑でくしゃみ弾を爆破処理した場所を特定し、９月１８日に、周辺地区の環境影響を調査するため、河川水（沢水を含む）、地下水（飲用井戸）の水質調査をおこなった。その分析結果において、ヒ素濃度は、いずれの地点も環境基準値を下回った〔１０〕。この結果は各紙で報道されている〔１１〕〔１２〕。

C

事案名	根室市の事案　（北海道１－７）
分類	○発見・被災・掃海等処理情報
資料	・証言〔1〕
資料内容概要	北海道根室市の崖下２箇所の横穴式弾薬庫に、毒ガス弾を保有していた。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・証言者（元陸軍兵器補給廠根室港出張所員）の証言として、当時、陸軍兵器補給廠根室港出張所に勤務していた軍人から、「根室市の崖下２箇所に横穴式弾薬庫があり、そこに毒ガス弾があったようだ」と聞いたと記載されている〔1〕。

D

事案名	標津町の事案　（北海道１－８）
分類	○発見・被災・掃海等処理
資料	・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス等の処理の状況(14.6)」〔1〕 ・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告(案)」資料３の２ No.２２〔2〕 ・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告(案)」資料３の２ No.２４〔3〕 ・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告(案)」資料３の２ No.５０〔4〕
資料内容概要	北海道標津町では、イペリット弾、内容不明の砲弾が発見され、それぞれ焼却処理、コンクリート密封された。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・昭和３５年7月１２日から１３日に、標津町でイペリット(弾)３発が発見されて、拾得者（民間人）６名が負傷した。自衛隊が焼却処理したと記載されている〔1〕〔2〕。 ・昭和３５年１１月１日に、標津町で内容不明の弾１発が発見され、自衛隊が焼却処理したと記載されている〔1〕〔3〕。 ・昭和４２年8月１１日から１５日に、標津町で内容不明の弾１発が発見され、自衛隊がコンクリート密封したと記載されている〔1〕〔4〕。

D

事案名	稚内市の事案　（北海道１－９）
分類	○ 発見・被災・掃海等処理
資料	・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス等の処理の状況(14.6)」〔1〕 ・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料３の２№２３〔2〕
資料内容概要	北海道稚内市で、くしゃみガス筒が発見され、自衛隊により焼却処理された。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・北海道稚内市で、昭和３５年７月２７日から８月５日にくしゃみガス筒（１０Kg）２本が発見され、自衛隊が焼却処理したと記載されている〔1〕〔2〕。

D

事案名	根室海岸の事案　（北海道１－１０）
分類	○ 発見・被災・掃海等処理
資料	・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料３の２ No. ２５〔1〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス等の処理の状況(14.6)」〔2〕
資料内容概要	根室海岸で、内容不明の弾３発が発見され、海中投棄された。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・昭和３６年1月１２日から１３日の日付で、根室海岸で内容不明の弾３発が発見され、羅臼沖約７Km の水深８００m の海域に海中投棄（海上保安庁）と記載されている〔1〕〔2〕。

D

事案名	戸井村の事案　（北海道１－１１）
分類	○ 発見・被災・掃海等処理
資料	・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料３の２ №３２〔1〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス等の処理の状況(14.6)」〔2〕
資料内容概要	北海道戸井村で、くしゃみ性ガス弾１発が発見され、爆破処理された。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・昭和３７年９月１５日から２３日に、北海道戸井村からくしゃみ性ガス弾１発が発見され、自衛隊が爆破処理したと記載されている〔1〕〔2〕。

D

事案名	滝上町の事案（北海道１－１２）
分類	○ 発見・被災・掃海等処理
資料	・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告（案）」〔1〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス等の処理の状況(14.6)」〔2〕
資料内容概要	北海道紋別郡滝上町で、くしゃみ性ガス弾１発が発見され、自衛隊によって爆破処理された。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・昭和４０年６月７日から１２日に、北海道紋別郡滝上町で発見されたくしゃみ性ガス弾１発を自衛隊が爆破処理したと記載されている〔1〕〔2〕。

D

事案名	北海道内の事案　（北海道１－１３）
分類	○発見・被災・掃海等処理
資料	・化学室担当者ノート「終戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔1〕
資料内容概要	北海道内で爆弾１発が発見され、海上保安庁の海中投棄を自衛隊が支援し処理した。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・昭和４０年１１月１８日に、北海道内で発見された爆弾（内容不明）１発を海上保安庁が自衛隊の支援を受け、釧路市沖約１１０ｋｍ、水深４０００ｍに海中投棄したと記載されている〔1〕。

C

事案名	札幌市の事案　（北海道１－１４）
分類	○生産・保有 ○廃棄・遺棄 ○発見・被災・掃海等処理情報 ○現在の状況
資料	・「本邦化学兵器技術史〔年表〕」昭和３２年２月〔1〕 ・証言〔2〕 ・「厚別弾薬庫　開設１０周年記念誌」昭和３８年２月１日〔3〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査について」平成１５年１０月２０日〔4〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔5〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ再調査結果について」平成１５年１０月１０日〔6〕
資料内容概要	終戦時、北海道札幌市内には、北海道陸軍兵器補給廠があり、同補給廠には旧軍毒ガス弾等が保有されていた。第六陸軍技術研究所の疎開により同市内の教育施設では毒ガスの研究が行われていた。また、戦後、同市内の公的施設において毒ガスサンプル等が発見され自衛隊が処理をした。 ○生産・保有情報 ・終戦時に、市内の教育施設の研究室には第六陸軍技術研究所の札幌研究室が存在し、青酸の研究が行われていたと記載されている〔1〕。 ・証言者（元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長）の証言として、終戦時、厚別弾薬庫及び小樽出張所に毒ガス兵器が存在していたと記載されている〔2〕。なお、厚別弾薬庫では大量のあか筒を保有しており、終戦時に、小樽沖に海中投棄および留萌市内の廃坑に埋設し、爆破処理された〔3〕〔4〕。 ○廃棄・遺棄情報 ・元北海道陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長による証言では、あか筒は小樽湾に海洋投棄し、この作業で死亡したのは６名であったとしている〔2〕。 ○発見・被災・掃海等処理情報 ・北海道警本部長の要請を受けた自衛隊は、昭和５２年１１月に、北海道札幌市で発見されたホスゲン容器１個・毒ガスサンプル６個をコンクリート詰めにした後に海中投棄したと記載されている〔5〕。 ○現在の状況 ・厚別常駐班（厚別弾薬庫）跡には、公共施設、商業施設、医療機関等が建設されており井戸水は５件使用している〔6〕。